

## ロシア語のСТИХИЯ(スチヒーヤ)

—ロシア人の人間観・言語観をのぞく窓—

郡 伸哉

### 目次

1. スチヒーヤの独自性
  - 1.1. 語義
  - 1.2. 語源：ストイケイオン
  - 1.3. スチヒーヤとエレメント
  - 1.4. 研究の視点
2. ブロックにおけるスチヒーヤ
  - 2.1. 『文化とスチヒーヤ』
  - 2.2. 『十二』
  - 2.3. 『詩人の使命について』
3. プーシキンにおけるスチヒーヤ
  - 3.1. 『海に』：海・自由・スチヒーヤ
  - 3.2. 『詩人』：創作の源泉としてのスチヒーヤ
  - 3.3. 『青銅の騎士』：創造と破壊の二面性
  - 3.4. オドーエフスキーのスチヒーヤ：もうひとつの二面性
4. チュッチェフにおけるスチヒーヤ
  - 4.1. 『大洋が地球をおおうように』、『波と思い』：人間とスチヒーヤのつながり
  - 4.2. 『何を唸っているのだ？ 夜の風よ』：人間とカオスの血縁性
  - 4.3. 『海の波には調べがある』：人間とスチヒーヤの溝
5. 文化の二分法の中でのスチヒーヤ
  - 5.1. ニーチェ：アポロンのものとディオニュソスのなもの
  - 5.2. ヴァッチェスラーフ・イヴァーノフ：ディオニュソスとスチヒーヤ

## 6. ロシアとスチヒーヤ

- 6.1. ベールイ：ロシア・メシア・スチヒーヤ
- 6.2. ベルジャーエフ：ロシア的スチヒーヤの危険性
- 6.3. レーニン：スチヒーヤのコントロール

## 7. スチヒーヤとしてのロシア語

- 7.1. ヴァチェスラーフ・イヴァーノフ『われらの言語』
- 7.2. マンデリシュタム『言葉の本質について』
- 7.3. おわりに

## 1. スチヒーヤの独自性

これからロシア語の стихия (スチヒーヤ) という単語について、19・20 世紀の幾人かのロシアの作家がそこにこめた意味を中心に考えてみたい。

### 1.1. 語義

まず、スチヒーヤの語義をアカデミー17 巻本のロシア語辞典によって示す<sup>1)</sup>。

名詞 стихия (スチヒーヤ)

1. 古代ギリシャの唯物論哲学者において、すべての物質の基礎にある基本元素 (水、土、空気、火) のひとつ。// また、(比喩、古義で) 何かの基本要素、重要な部分。
2. 強力な、克服が困難な、しばしば破壊的な力としてあらわれる自然現象、さらにそれが生じる領域、環境。// また、人間に敵対的な何らかの現象、力について言う。// また、強力な、意志に支配されない、説明できない感情、衝動、盲目的な本能。
3. 人々、社会の規制的なはたらきかけに従わない社会的な現象。// また、盲目的に、非組織的に、導きなしに動く社会層、大群衆。
4. 慣れ親しんだ環境、存在の環境。// また、慣れ親しんだ好みの仕事や関心事等。誰かにとって精神的にとくに身近なもの、よく知ったもの。

形容詞 стихийный (スチヒーヌイ)

1. スチヒーヤ 1 の意義にかかわり、スチヒーヤに特有な。

2. スチヒーヤ 2 の意義にかかわり、スチヒーヤ (たち) の動作によって引きおこされた。// また、スチヒーヤに特徴的な、盲目の、無意識の。// また、強い、意志に支配されない、意識を介さず生じる、意志や理性に従わない。
3. 自然のプロセスとして、人々や社会の規制的是たらきかけなしに生じる。// 導きなしに、誰にも組織されずに生じる。

さらにこの形容詞から作られた単語として、副詞 **стихийно** (スチヒーノ)、名詞 **стихийность** (スチヒーノスチ) がある。

## 1.2. 語源：ストイケイオン

ロシア語のスチヒーヤという言葉は、ギリシャ語のストイケイオン **στοιχείον** (stoikheion) からきている。ストイケイオンは、(1) 日時計の指示針、(2) 連続した物のひとつ、言語を構成する音、文字、基本元素、知識の基礎、初歩、などの意味をあらわした。このうち「基本元素」とは、古代ギリシャで万物の根源をなす物質と考えられたもの、すなわち土、水、空気、火をさす。エンペドクレスは、これら4つの元素に同等の地位をあたえ、それらの結合と分離によって万物の生成・消滅が生じると考えた。ただしこの4元素の意味でストイケイオンという言葉を最初に使ったのは、エンペドクレスではなく、プラントンだという。またこの単語によって、海や陸などの具体的なものをあらわすこともあった<sup>2)</sup>。

ラテン語は、ギリシャ語のストイケイオンにたいする訳語としてエレメントウム **elementum** という単語を当てた。エレメントウムは、基本元素、字母、アルファベット、基礎、初歩、起源、アリストテレスのいう10のカテゴリー、などをあらわした。このエレメントウムを受け継ぐ単語が、西欧諸語(ロマンス諸語、ゲルマン諸語)にある。英語 **element**、ドイツ語 **Element**、フランス語 **élément**、イタリア語 **elemento** などである(以下これらをカタカナで「エレメント」と総称することにする)。エレメントは、基本元素、学問の基礎、初歩などをさすほかに、元素たちが引きおこすような自然の猛威も意味し(基本的に複数形で)、他方で、近代科学でいう化学元素、さらに一般に何かの構成要素という意味をもつ。そのほか、存在の領域、慣れ親しんだ環境、もあらわす。

エレメントという言葉は、そのままロシア語にも入っている。すなわち **элемент** (エレメント) で、これは古い用法としては、基本元素、自然の力、存在領域といった、スチヒーヤと同じ意味でも使われたが、現在では、ものごとの基礎、化学元素、構成

要素、社会の分子、といった意味をあらわす。この単語がロシア語に入ってきたのは、18世紀初め頃、ドイツ語ないしオランダ語からと考えられている<sup>3</sup>。

スチヒーヤという言葉は、ギリシャ語から古代教会スラブ語をとおしてロシア語に入ってきたので、これと同じ系統の言葉が、東方正教圏の東スラブ・南スラブ諸国の言語（ウクライナ語、ベラルーシ語、ブルガリア語、セルビア語）の中にも存在する。西スラブでは、ポーランド語 *żywiol*、チェコ語 *živěl* といったように、「生きた」という意味の言葉（*żywy, živý*）から派生した単語がこれに対応する。

チェルヌイフのロシア語語源辞典は、スチヒーヤについて、中世ロシア語で「基本元素」の意味で使われていたことを述べたあと、明確に現代的な意味で用いた最初の例として、デルジャーヴィン（1743–1816）を挙げている<sup>4</sup>。具体例としては、『メシチェルスキー公爵の死によせて』《На смерть кн. Мещерского》（1779）という詩の一節「柩をスチヒーヤたちの悪意が蝕む」*Гробницы злость стихий снесает*. を挙げている。人間の肉体を腐敗させていく非生命的で無慈悲な自然の力を含意するという点が、スチヒーヤの現代的な用法ということであろう。

### 1.3. スチヒーヤとエレメント

ロシア語のスチヒーヤの語義の多くは、西欧諸語のエレメントに対応物を見いだせる。しかしロシア語のスチヒーヤが、「自然の猛威」の意味のほか、さらに「人間の内面における衝動的な力あるいは性質」、「自然発生的な社会現象」をもさすのにたいして、西欧諸語のエレメントの方は、さまざまな辞書を見ても、自然界の力をあらわす語義は載っているものの、精神的・社会的な領域の力をあらわす用法は、字義として載っていないことが多い（「隠喩ないし比喩」として「自然のエレメントと類比的な力をあたえられたあらゆる力」という語義をたてている辞書はある<sup>5</sup>）。一方、ロシア語のスチヒーヤにおける精神的・社会的な力の意味は、辞書の定義から見ても、あとで検討する具体例から見てもわかるように、もはや比喩ではないのである。

ただしエレメントも、その形容詞形となると、すこし事情が異なる。英語 *elemental*、ドイツ語 *elementar*、フランス語 *élémentaire* などは、感情や衝動について「理性で抑えられない、強い」という意味をもつ。名詞の形容詞形は一般に「～的な」という比喩の活躍する場であるからだろう。もっとも、エレメントの形容詞形のこの語義での活躍の度合いは、スチヒーヤの形容詞形に比べれば低いと思われる。

もしスチヒーヤの語義において、「自然の力」の「力」の部分が抽象化され、適用範囲を精神や社会の領域に拡大したと言えるとすれば、エレメントはこの語義での抽

象化・拡大化の度合いが低く、基本的には「自然にそなわる力」の範囲内でとらえられていると言える。

他方で西欧語のエLEMENTが担う中心的意味は、「(近代科学的意味での)化学元素」、「(一般に)何かを構成する要素」である。それにたいしてロシア語のスチヒーヤは、「化学元素」の意味で使われることはなく、「要素」の意味で使うことも少ない(もっともスチヒーヤが、古代的な元素の響きを残しながら、「要素」の意味で使われる例は、あとでも見るように存在する)。ロシア語において「化学元素」や「要素」の意味は、西欧のエLEMENTをそのまま取り入れたэлемент (エレメント) が担っているからであろう。このことは、ロシア語のスチヒーヤが、近代科学あるいはそれに支えられた合理的・日常的思考との結びつきが少ないということを意味するだろう。じっさいこの言葉は、日常的よりは詩的な、あるいは哲学的な文章の中で多く用いられる言葉である(ウシャコフの辞書は、この言葉を「文語」と規定し、とくに「(広く何らかの)力」をあらわす場合は「詩語」と規定している<sup>6)</sup>。

おそらく、ギリシャ語から教会スラブ語を通して先に入っていたスチヒーヤという言葉は、近代になって西欧の対応語ELEMENTの影響を受けながらも、その近代的用法という根幹部分を(элементが担ったので)排除していき、以後、独自の用法を作りあげていったと想像される。より具体的に推測すれば、西欧近代においてELEMENTの語義が、古代的な「基本元素」から近代的な「化学元素」へと重点を移し、「(一般に)構成要素」という機能的な意味の比重も高めていくのと対照的に、スチヒーヤは古代的元素の意味を中心的なものとして担いつづけ、そこへ(おそらくこの点では西欧近代のエLEMENTの詩的用法に残る古代的要素とも連動して)古代的自然観に由来する「自然の力」の意味を背負いこみ、さらにその意味の比重が増大し、その適用範囲も自然界を超えて精神界へと及ぶようになったのではないか、という想像が成りたつ。さらにそこに、西方ラテン世界とは異なる東方正教圏の精神風土がかかわった可能性も考えてみる必要があるだろう。検証は今後にゆだねるしかないが、ここではとりあえず可能性として以上の考えを述べておく。

ただし、あとで見るように、スチヒーヤの用法の独自性が生じるにあたって、ロマン主義やニーチェといった、西欧から入ってきた思想潮流が重要な触媒機能を果たしたであろうことを忘れてはならない。

#### 1.4. 研究の視点

アルチュノーヴァの『言語と世界、人間』という本には、人間のコントロールを超

えた動作をあらわすようなロシア語の表現が取りあげられている（第X章「無人称性と不定性」Безличность и неопределенность、第2節「制御されない動作」Неконтролируемые действия）<sup>7</sup>。そこでは、-ся動詞による表現、само собой（おのずから）という言い回し、主体表現に関するロシア語のシンタクスの柔軟性、他動詞の無人称表現などが、具体的に検討されている。そうした検討に入るにあたってアルチュノーヴァは、ロシア語のスチヒーヤという単語に注意を向ける。そしてスチヒーヤというロシア語の独自性について簡単に説明したうえで、さまざまな作家、とりわけ20世紀初頭の思想家や詩人が、この言葉があらわす観念をロシアと結びつけてきたことを述べる。さらにスチヒーヤが広い空間、精神の広さという観念とかかわっていることを述べ、スチヒーヤの反対概念としてヴォーリャ（意志、自由）を挙げている。

アルチュノーヴァが、ロシア語における無人称性・不定性の表現の豊かさを象徴する言葉としてスチヒーヤを見ていることがわかる。そうした観点からロシア語を言語学的に検討することはたいへん興味深い仕事であるが、わたしたちとしては、スチヒーヤという言葉にこめられた理念、情念の方を、もうすこし細かく具体的に見ていきたい。

もちろんこの言葉にこめられたものの背後には、ギリシャ語のストイケイオン、ラテン語のエレメントゥム、それを受け継ぐ西欧諸語のエレメントなどがもつ長い歴史があるわけで、これは壮大な精神史の探究になりうる事柄である。スチヒーヤの語義の中世から近代への変遷過程も重要である。しかしいまは、とりあえずその広がりだけを念頭におきながら、19世紀以降のロシアに的を絞ることにしたい。そして本稿では、そのささやかな出発点として、この語に何らかの重みをあたえて用いた何人かの作家（文学者、思想家）の若干の用例を検討したい。

なお、この語の用例を実際に検討する際の困難について一言いっておくと、まず、この語は、明確な概念をもつ哲学その他の学問の用語として使われる単語ではない。そして、すでに述べたように、この語のもつ複数の語義の境界が曖昧である。たとえば、この語をたんに「要素」、「性質」、「原理」、「領域」といった意味で機能的に使っているように見える場合でも、「力」の意味合いを背負いこんでいると感じられることが多い。無意識性を含意するこの語自体が、無意識的に、自由に、曖昧に使われる傾向が強いように思われる。そのことは、検討に困難をきたす一方で、検討の価値をあたえているとも言える。

## 2. ブロックにおけるスチヒーヤ

まずは、今後の議論を進めるうえでひとつの結節点となるブロック (1880—1921) を見てみたい。そして、そこから見えてくる同時代的な横の広がり、過去との縦のつながりを、そのあとに検討していく。

### 2.1. 『文化とスチヒーヤ』

『文化とスチヒーヤ』《Культура и стихия》(1909) は、1908年の口頭報告に基づく論文で、それより先の報告『ナロードとインテリゲンツィア』(論文公表 1909) にたいする反論に答える形のものである。『ナロードとインテリゲンツィア』の主張の要点は、現代のロシアにおいては、例外を除けば、インテリゲンツィとナロード(民衆)のあいだには大きな溝が存在するということであつた。『文化とスチヒーヤ』では、それにくわえて、いまの時代には、文化とスチヒーヤのあいだでの復讐の応酬のようなものが進行していると主張する。

論文は言う。人々はいま、カタストロフィーを予感している。それはインテリゲンツィアとナロードの決裂の予感である。しかし人々はその予感に耳を塞ごうとしている。ここでブロックは、当時イタリアで起こった地震を例にひく。地震、すなわち「地下のスチヒーヤ」が人々を襲う。しかし学者たちは、いまずぐにはなくとも、いずれは科学がこれを克服すると考えている。同じように、インテリゲンツィアとナロードの断絶の危機をいくら語っても、人々は、どんな病でも直せるとばかりに、進歩の夢に浸っている。これは「無限なる文化の夢と酩酊」であり、ニーチェの用語で言えば、「アポロ的な夢」を見ているのである。アポロ的な夢の中では、大地、地中、海、海底、大気がどんどん征服されていく。すると突然、地震が襲う。学者は、まだ地殻が固まっていないところがあるのだと言う。では、と論文は問う。

А уверены ли мы в том, что довольно «отвердела кора» над другой, такой же страшной, не подземной, а земной стихийей — стихийей народной?<sup>8</sup>

では、われわれは確信しているのだろうか、もうひとつの、同じくらいに恐ろしいスチヒーヤ、地下ではなく地上のスチヒーヤ、ナロードのスチヒーヤの上では、十分に「殻が固まっている」のだと確信しているのか？

地震はこれまでに何度も起こっている。そのたびに文化は鎧を固めてきた。文化はお

のれを縛る大地を呪い、大地を飛び立とうとする。文化は大地に復讐をするのである。すると今度は大地が、スチヒーヤが、文化に復讐をする。文化の復讐、そして大地とスチヒーヤの復讐——この二つの復讐のはざまでわれわれは生きている。これがこの論文の要旨である。

ここには人間と社会をとらえるにあたっての二分法がはっきりとあらわれている。すなわち「文化とスチヒーヤ」という二項対立、そしてそれに重ねられる「インテリゲンツィアとナロード」。そして、その一方の項を占める「スチヒーヤ」と「ナロード」には、さらに「大地」と「ロシア」が重ねられる。

こうした二分法は、ブロークだけに見られるのではなく、同時代的な広がりをもっている。この点については、以下の第5章で検討する。

## 2.2. 『十二』

スチヒーヤはブロークの創作全体を貫いていると言えるだろう。たとえば、1917年の革命のあとに書かれた有名な長編詩『十二』《Двенадцать》(1918)には、スチヒーヤという言葉こそ使われていないが、「風」という形で、スチヒーヤのイメージが全編を支配していると言える。

Черный вечер.

Белый снег.

Ветер, ветер!

На ногах не стоит человек.

Ветер, ветер —

На всем божьем свете!<sup>9</sup>

黒い夜。

白い雪。

風、風！

人は立ってられない。

風、風—

この世すべてに吹いている！

こうして吹雪が吹き荒れるペテルブルグの街路を、赤衛軍兵士たちが進んでいく。出



会う者たちを容赦せずに。やがて兵士たちの前を歩く者の姿が見えてくる、キリストの姿が…。

ブロークはこの詩に関するメモ (1920) の中で以下のように書いている。

…в январе 1918 года я в последний раз отдался стихии не менее слепо, чем в январе 1907 или в марте 1914. Оттого я и не отрекаюсь от написанного тогда, что оно было писано в согласии со стихийей: например, во время и после окончания «Двенадцати» я несколько дней ощущал физически, слухом, большой шум вокруг — шум слитный (вероятно, шум от крушения старого мира).<sup>10</sup>

…1918年1月に、わたしは、いちばん最近の体験としてスチヒーヤに身をゆだねた、1907年1月と1914年3月に劣らぬほどにわれを忘れて。そのとき自分が書いたものをわたしが否定しないのは、それがスチヒーヤにしたがって書かれたからだ。たとえば、『十二』を書いていたとき、そしてそれを書き終えたあと、わたしは数日間、物理的に、わが耳で、あたりに大きなざわめきを聞いていた、ひとつに融けあったざわめきを (おそらく古い世界の崩壊のざわめきを)。

したがってこの詩を政治詩と見るのはまちがいだ、とブロークは言う。上の引用の中で、「1907年1月と1914年3月」というのは、ともに恋愛の体験をさしている。ここに読みとれることは、スチヒーヤが、自然界 (= 風)、社会 (= 革命)、人間の内面 (= 恋愛) という次元の異なるものを貫く強力な力としてとらえられていることである。このとらえ方の伝統については、のちに第4章でチュツチェフを取りあげる際にあらためて触れる。

### 2.3. 『詩人の使命について』

『十二』にあらわれたスチヒーヤは、ブロークにとって、一方で崩壊に導く力であったが、他方で創作の源泉であった。のちの論文『詩人の使命について』(«О назначении поэта») (1921) では、彼はプーシキンを論じながら、芸術的創造の源泉としてのスチヒーヤを語る。それはプーシキンの『詩人』(«Поэт») という詩を引用しながら説明するくだりにある。そこでまずプーシキンの詩を見ておこう。この詩に出てくる詩人は、詩神アポロンの求めがないときは日々の雑事にかまけている。しかし、いったんアポ

ロンの求めがあれば、「彼は走ってゆく、人を寄せつけぬ厳しい面もちで、／音と心の昂ぶりに満たされ、／荒涼たる波の岸辺にむかって、／ざわめきの広がるオークの林にむかって…」(Бежит он, дикий и суровый, / И звуков и смятенья полн, / На берега пустынных волн, / В широкошумные дубровы...) この4行を引用しながらブロークは書く。

Дикий, суровый, полный смятенья потому, что вскрытие духовной глубины так же трудно, как акт рождения. К морю и в лес потому, что только там можно в одиночестве собрать все силы и приобщиться к «родимому хаосу», к безначальной стихии, катящей звуковые волны.<sup>11</sup>

人を寄せつけぬ厳しい面もちをし、心の昂ぶりに満たされているのは、精神の深みを明かすことが、生み出す行為と同じように困難だからである。海と森にむかっていくというのは、そこでは、あらゆる力をふるうこと、そして「血のつながったカオス」に身を浸すこと、音の波をうねらせる永遠のスチヒーヤに身を浸すことができるからである。

ここに指摘されたような、プーシキンにおける創造の源泉としてのスチヒーヤについては、このあと第3章で詳しく見る。また、この引用にある「血のつながったカオス」«родимому хаосу»という表現は、チュツチェフに由来する。これもあとで詳しく見ることにする。ここでは、カオスという観念がスチヒーヤと深い類縁性をもっていることを確認しておきたい。

### 3. プーシキンにおけるスチヒーヤ

ブロークの源泉のひとつ、そして他の多くの著作家の源泉であるプーシキン(1789—1837)についてこれから見る。プーシキンはスチヒーヤという単語を全著作で12回使っているが、以下ではこの言葉の使われている作品を中心に、3つの作品を見てみる。

#### 3.1. 『海に』: 海・自由・スチヒーヤ

『海に』«К морю»(1824)という詩は、詩人が海にむかって別れを告げる言葉で始まる。

Прощай, свободная стихия!<sup>12</sup>

さらば、自由なるスチヒーヤよ！

このあと詩人は、ナポレオンとバイロンの死に思いをめぐらせ、バイロンの巨大さを海に語る。「おまえの姿は彼の上に刻印された。彼はおまえの息吹によってつくられた。」バイロンは海のスチヒーヤに満たされる人間、スチヒーヤが刻印される人間なのである<sup>13</sup>。詩人は、ロマン主義を体現する巨人の死によって世界が空虚になったことにとまどう。しかし詩人は、海の姿と波音をずっと忘れずにいようと決意し、最後にこう締めくくる。

В леса, в пустыни молчаливы  
Перенесу, тобою полн,  
Твои скалы, твои заливы,  
И блеск, и тень, и говор волн.<sup>14</sup>

森のなかへ、もの言わぬ荒野へと、  
おまえに満たされて、わたしは運んでいこう、  
おまえの岸壁を、おまえの入り江を、  
輝きを、影を、波音を。

「自由なるスチヒーヤ」と呼びかけられる自然と、それと一体化することを目指すロマン主義的人間。スチヒーヤに「自由な」という形容詞をかぶせたことによって、プーシキンは、おそらくスチヒーヤという言葉の用法を大きく拡大したと考えられる。スチヒーヤが人間にたとえられ、人間がスチヒーヤにならぶことになるからである。

この詩で詩人が向きあっている海は黒海であるが、すこし年下の詩人チュッチェフは、『黒海』《Черное море》(1871)という詩の中で、わざわざこのプーシキンの表現に言及している。「そして『自由なるスチヒーヤよ』／と、わが祖国の詩人なら言うであろう—」 И вот — «свободная стихия», — / Сказал бы наш поэт родной, —<sup>15</sup>。この詩は、プーシキンの国民的名声に寄りかかった、きわめて政治的、愛国主義的な詩であるが、他のより芸術的な詩においてチュッチェフが表現するスチヒーヤのイメ

ージは、あとで見るように、内省的、瞑想的なものである。そしてスチヒーヤと一対一で対峙する人間をとらえている点において、チュツチェフがプーシキンに通じていることはたしかである。

### 3.2. 『詩人』：創作の源泉としてのスチヒーヤ

プーシキンの『詩人』《Поэт》（1827）という詩については、すでにブロークの論文『詩人の使命について』を見る中で触れた。

Бежит он, дикой и суровый,  
И звуков и смятенья полн,  
На берега пустынных волн,  
В широкошумные дубровы...<sup>16</sup>

彼は走ってゆく、人を寄せつけぬ厳しい面もちで、  
音と心の昂ぶりに満たされ、  
荒涼たる波の岸边にむかって、  
ざわめきの広がるオークの林にむかって。

ここでは、この4行中の真ん中の2行を、上に見た『海に』のうちの2行と比較してみたい。

『詩人』：

И звуков и смятенья полн, / На берега пустынных волн,  
音と心の昂ぶりに満たされ、 / 荒涼たる波の岸边にむかって、

『海に』：

Перенесу, тобою полн, / 〈…〉 / И блеск, и тень, и говор волн.  
おまえに満たされて、わたしは運んでいこう / 〈…〉 / 輝きを、影を、波音を。

両者は、「満たされて」полнと「波」волнが押韻している点を含めて、よく似ている。『詩人』においても、『海に』と同じく、創造の源泉がスチヒーヤであることを示していたと言えるだろう。『詩人』を引きながらスチヒーヤを語ったブロークは、この

点をよくとらえていたと言える。もっとも彼は、他方で破壊の源泉としてのスチヒーヤをもとらえていた。そしてこのスチヒーヤの創造性と破壊性の両面が、すでにプーシキン自身の中に見られることを、つぎに確認したい。

### 3.3. 『青銅の騎士』：創造と破壊の二面性

長編詩『青銅の騎士——ペテルブルグ物語』《Медный Всадник. Петербургская повесть》(1833)を見てみよう。この作品では、ピョートル大帝がネヴァ河の河口にペテルブルグを建設した経緯と、その後の都市の繁栄ぶりが歌われ(序)、1824年の大洪水と、そこで婚約者を失って狂気に陥る青年エヴゲーニーの物語が語られる(第1部および第2部)。なかでも、エヴゲーニーがピョートル大帝の銅像にむかって脅しの言葉を投げかけると、銅像が動きはじめ、彼を追いかけるという幻想の場面が有名である。

この作品では、洪水を引きおこすような水の威力が「スチヒーヤ」という言葉で表現されるところが二カ所ある。

そのひとつは、都市ペテルブルグを賛美する「序」の中にある。

Да умирится же с тобой  
И побежденная стихия;  
Вражду и плен старинный свой  
Пусть волны финские забудут  
И тщетной злобою не будут  
Тревожить вечный сон Петра!<sup>17</sup>

そしておまえとの和解に  
征服されたスチヒーヤもまた至るように！  
敵意と永き虜囚の恥辱を  
フィンランド湾の波が忘れるように！  
そして無益な憎悪によって  
ピョートルの永遠の夢を乱さぬように！

もうひとつの用例は、「第1部」で時の皇帝アレクサンドル一世が、洪水に襲われた街を前につぶやく言葉の中にある。

〈…〉 «С божьей стихией  
Царям не совладеть». 〈…〉<sup>18</sup>

〈…〉「神のスチヒーヤにたいしては  
皇帝になすすべはない。」〈…〉

ところで、『青銅の騎士』は、こう始まっている。

На берегу пустынных волн,  
Стоял Он, дум великих полн.<sup>19</sup>

荒涼たる波の岸辺に  
あの人立っていた、壮大な思いに満たされて

ここで、「満たされ」полнと「波」волнが韻を踏んでいることは、いまさきに見た『詩人』の詩行を思いださせる（И звуков и смятенья полн, / На берега пустынных волн, 「音と心の昂ぶりに満たされ、／荒涼たる波の岸辺にむかって」）。両者を比べると、押韻が同じであるだけでなく、他の語彙もよく似ている。したがって『青銅の騎士』の詩行はまた、『海に』の最後の詩行にも通じることになる。『海に』、『詩人』、『青銅の騎士』、——これら3篇中の類似の詩行に共通する事柄、それは創造の行為である。前二者では詩の創造、そして『青銅の騎士』では都市の創造が問題になっている。

ところで、『青銅の騎士』でスチヒーヤという言葉が使われるのは、上に見た皇帝にかかわる二カ所である。しかしスチヒーヤはもうひとりの登場人物エヴゲーニーにも働いていると考えられる。洪水が起こる直前に、水位が高まるなかで、エヴゲーニーは、結婚して家庭を築くことを夢想する。「あれこれの思いの波にゆすられて」、「詩人のごとく夢に浸った」。その後エヴゲーニーは、洪水によって婚約者を奪われ、狂気に陥る。洪水の力は、そんな彼にもまだ容赦なく作用しつづける。「彼の耳のなかでは、ネヴァと風の不穏な響きが鳴りひびいていた」。ピョートル大帝やアレクサンドル皇帝との関わりで言及されたスチヒーヤは、〈小さな人間〉エヴゲーニーにも作用していると考えてよい。

エヴゲーニーが、「あれこれの思いの波にゆすられて」、「詩人のごとく夢に浸っ

た」という描写は、作品の冒頭にあるピョートルの描写と対比させることができる。「荒涼たる波の岸辺に／あの人立っていた、壮大な思いに満たされて。」規模こそ異なるが、二人の思いは、ともに海の波＝スチヒーヤに共振しているのである。スチヒーヤは、一方でピョートル大帝に壮大な都市創造の構想とその実践をうながし、他方でエヴゲーニーにおいて、ささやかな家庭を作る夢とその破綻、そして無益な反乱と狂気の幻想を引きおこしたわけである。

スチヒーヤのもつ破壊性と創造性。この二面性——スチヒーヤという言葉の使われ方を見る際に重要なこの二面性を、すでにプーシキンが『青銅の騎士』の中に描きだしているのである。

### 3.4. オドーエフスキーのスチヒーヤ：もうひとつの二面性

オドーエフスキー（1803—1869）はプーシキンの大きな影響を受けた同時代の作家のひとりである。彼は短編小説『死者の嘲り』《Насмешка мертвеца》（1834）の中で、都市を襲う洪水を描き、その力をスチヒーヤという言葉であらわしているが、これは『青銅の騎士』の翌年に書かれた作品である。

オドーエフスキーの小説『サラマンダー』《Саламандра》（1841）もまた、プーシキンを意識しつつ、すこし異なる視点からスチヒーヤの二面性を描いた作品といえることができる。

この小説は、とりわけプーシキンの小説『ピョートル大帝の黒人奴隷』（1827—1828、未完）を意識している。このプーシキンの作品には、『青銅の騎士』と同じように、ピョートルがなすとげていく都市建設が、「スチヒーヤ [複数] の抵抗にたいする人間の意志の勝利」победу человеческой воли над супротивлением стихий<sup>20</sup>をあらわしていた、と述べられている。これを受けてオドーエフスキーの小説の第1部には、ピョートルがつぎのように描かれている。「このロシアの偉大な指導者は、彼 [主人公] には、巨人のようにも、スチヒーヤ [複数] を克服する魔法使いのようにも見えた。」великий вождь России представлялся ему то в виде исполина, то в виде чудного волхва, покоряющего стихии.<sup>21</sup> ここでのスチヒーヤは、「魔法使い」が「魔術」でコントロールしようとする根源的物質、つまり元素（エレメント）をさしていると考えられるべきであろう。このことは、第2部の錬金術のテーマにつながっていく。

小説の第2部は、錬金術に耽って破滅する人間の話である。錬金術とは、金を生みだし、不死を得るために、根源物質（エレメント、スチヒーヤ）を操る行為とすることができる。登場人物の言葉で言えば、「あらゆるスチヒーヤの霊たちと闘う」

бороться со всеми стихийскими духами<sup>22</sup> ことである。この小説では、「火」のエレメントが活躍する。すなわち、火をコントロールすることで金を作りだそうとした主人公が、火の精サラマンダーに焼かれて消えてしまう。

第1部では、スチヒーヤを克服せんがごとき偉大な姿のピョートルが活躍する。他方、第2部ではスチヒーヤを操ろうとして破滅する人間が描かれる。オドーエフスキーは、プーシキンの『青銅の騎士』と『ピョートル大帝の黒人奴隷』のスチヒーヤを、錬金術のスチヒーヤ（エレメント）に読み替えることで、プーシキンとはまた違った意味でのスチヒーヤの二面性を浮かびあがらせたと言えるだろう。

#### 4. チュッチェフにおけるスチヒーヤ

スチヒーヤの用法の歴史を考える上で、チュッチェフ（1803-1873）は、プーシキンとならんで重要な存在だと思われる。チュッチェフの詩の中から、この言葉を用いたものを含む4つの作品を見てみよう。

##### 4.1. 『大洋が地球をおおうように』、『波と思い』：人間とスチヒーヤのつながり まず、『大洋が地球をおおうように』《Как океан объемлет шар земной...》（1830）という詩を見てみよう。

Как океан объемлет шар земной,  
Земная жизнь кругом объята снами;  
Настанет ночь — и звучными волнами  
Стихия бьет о берег свой.

То глас ее: он нудит нас и просит..  
Уж в пристани волшебный ожил челн;  
Прилив растет и быстро нас уносит  
В неизмеримость темных волн.

Небесный свод, горящий славой звездной,  
Таинственно глядит из глубины, —  
И мы плывем, пылающею бездной  
Со всех сторон окружены.<sup>23</sup>



大洋が地球をおおうように、  
 地上の生を夢がつつむ。  
 夜がおとずれる——すると波音が響いてくる、  
 それはスチヒーヤがおのれの岸边に波うつ音。

それはスチヒーヤの声、ぼくらに請う声、強いる声…  
 埠頭では、もう魔法の小舟が揺れはじめる。  
 潮がみち、ぼくらを急いで運びさる、  
 暗く波だつ無限のかなたへ。

壮麗な星のきらめく天空は、  
 深みから、謎めく視線を投げかけている、——  
 そしてぼくらは進んでゆく、燃えさかる深淵に  
 四方から取り囲まれて。

ここでスチヒーヤは水、とりわけそれが波として動く働きをさしている。そしてそれは、恐ろしい「暗く波だつ無限のかなた」、「燃えさかる深淵」へと人間を連れていく。無限であり深淵であるスチヒーヤが、人間に働きかけ、人間の心の中に共振を起こすのである。無限なるスチヒーヤは、人間とつながった存在なのである。

もうひとつスチヒーヤを歌った詩『波と思い』«Волна и дума» (1851) を見てみよう。

Дума за думой, волна за волной —  
 Два проявления стихии одной:  
 В сердце ли тесном, в безбрежном ли море —  
 Здесь — в заключении, там — на просторе,  
 Тот же все вечный прибой и отбой —  
 Тот же все призрак тревожно-пустой.<sup>24</sup>

思いにつづく思い、波につづく波、  
 それは同じスチヒーヤの二つの現れだ。

狭い心臓のなかでも、広漠たる海のなかでも、  
 囚われのここでも、はるかに広がるかなたでも、  
 等しく永遠に、波が打ち寄せ、引いていく、  
 同じく不安で空虚な幻影がある。

ここでもスチヒーヤは波としてイメージされている。そしてここにも、さきほどの詩と同じく、無限なる自然と人間との深いつながりがあらわれている。そしてさきほどの詩から一歩進んで、ひとつの重要な世界観が提示されていると言える。すなわち、自然と人間の精神という二つの領域は同一の力で貫かれているという考え方が明確に打ちだされ、そしてその力がスチヒーヤと呼ばれているのである。さきにブロークの『十二』に関するメモの中で見たような、自然・社会・精神を貫くスチヒーヤというとらえ方と同じものがここにはある。ブロークの場合、それは風のイメージであらわされ、チュッチェフでは波のイメージであらわされている。

#### 4.2 『何を唸っているのだ？ 夜の風よ』：人間とカオスの血縁性

つぎに、スチヒーヤという言葉の使われない例ではあるが、『何を唸っているのだ？ 夜の風よ』 «О чем ты воешь, ветер ночной?» (1830) という詩を見てみよう。

О чем ты воешь, ветер ночной?  
 О чем так сетуешь безумно?..  
 Что значит странный голос твой,  
 То глухо жалобный, то шумно?  
 Понятным сердцу языком  
 Твердишь о непонятной муке —  
 И роешь и взрываешь в нем  
 Порой неистовые звуки!..

О, страшных песен сих не пой  
Про древний Хаос, про родимый!  
 Как жадно мир души ночной  
 Внимает повести любимой!  
 Из смертной рвется он груди,

Он с беспредельным жаждет слиться!..

О, бурь заснувших не буди,

Под ними Хаос шевелится!..<sup>25</sup>

何を唸っているのだ? 夜の風よ。

何をそんなにひどく悲しんでいるのだ?..

おまえの不思議な声は何を意味するのだ、

ときに抑えた悲しみの声、ときにさわがしく歌う声は?

人の心にわかる言葉を使って

おまえは、わけのわからぬ苦しみをくり返し語る——

そしてうめき、その言葉の中でとどろかせる、

ときに激しい音を!..

おお、これらの恐ろしい歌を歌うな、

古きカオス、血のつながったカオスの歌を!

夜の魂の世界は、なんと貪欲に耳を傾けていることか、

おのれの気に入りの物語に!

夜の魂の世界は、死すべき胸から飛びだして、

無限なるものと一つになろうと欲している!..

おお、嵐よ、眠りこんだ者たちを起こすな、

彼らの下にはカオスがうごめいているのだ!..

カオスは、人間の奥に深く潜み、人間を無限へと連れていく。この意味でカオスは、上に見た二つの詩におけるスチヒーヤと同じものである。同じものを、異なる局面で、あるいは異なる視点から表現する言葉とっていいだろう。そしてそのカオスにかかる形容詞「(人間と) 血のつながった родимый」もスチヒーヤに当てはめられるだろう。

さきにブロークがプーシキンを論じた文章を検討したとき、スチヒーヤの言いかえとして「血のつながったカオス」という表現が用いられていることに触れた。その表現は、まさにこの詩からとられている。チュッチェフは、ブロークの源泉のひとつであったが、ブロークと同時代の他のシンボリストたち、またその後の世代の多くの詩人たちにとってもまた大きな存在だった。

## 4.3. 『海の波には調べがある』: 人間とスチヒーヤの溝

もうひとつ、1865年に書かれた詩『海の波には調べがある…』《Певучесть есть в морских волнах...》を見てみよう。

*Est in arundineis modulatio musica ripis*

Певучесть есть в морских волнах,  
Гармония в стихийных спорах,  
И стройный мусикийский шорох  
Струится в зыбких камышах.

Невозмутимый строй во всем,  
Созвучье полное в природе, —  
Лишь в нашей призрачной свободе  
Разлад мы с нею сознаем.

Откуда, как разлад возник?  
И отчего же в общем хоре  
Душа не то поет, что море,  
И ропщет мыслящий тростник?<sup>26</sup>

*Est in arundineis modulatio musica ripis*

〔葦の生える岸边には音楽の律動がある〕

海の波には調べがある。  
スチヒーヤの争いには和音がある。  
そして調和のとれた音楽のざわめきが  
揺れる葦の中に流れている。

万物には揺るがぬ調和がある。  
自然には全き和音がある。  
ただ、われらの幻影のごとき自由の中でのみ、  
人は自然との齟齬を意識する。

どこからどのように、この齟齬は生じたのか？  
どうして万物が声をあわせて歌うなか、  
魂は、海と同じ歌を歌わぬのか、  
どうして考える葦は不平を言うのか？

この詩では、基本元素どうしの闘争の中にすら調和があると述べられることで、人間精神の自然からの乖離が強調されている。ここでスチヒーヤは、自由という運命を負わされた精神に対置されたものとしてあらわれている。この点で 1865 年に書かれたこの詩は、4.1. で見た 1830 年と 1851 年の詩とは、スチヒーヤのとらえ方が異なっている。もちろん、1865 年の詩が「スチヒーヤの争い」、つまり 4 つの元素のあいだの闘争という側面をとらえているのにたいして、前の 2 篇の詩は、自然界全体に潜むひとつの力としてのスチヒーヤを問題にしているという視点の違いがあることも確かである。それと同時に、ここでは立ち入らないが、詩が書かれたときの詩人の置かれた状況の違いも反映しているだろう。

このようにチュッチェフにおけるスチヒーヤのとらえ方には幅がある。これもまたスチヒーヤの二面性と言えるだろう。いずれにせよ、スチヒーヤという言葉が彼のロマン主義的、神秘的、悲劇的な自然観・人間観を表現するものとして重要な言葉であったことは間違いない。

## 5. 文化の二分法の中でのスチヒーヤ

プーシキンやチュッチェフにおけるスチヒーヤの用法には、デルジャーヴィンをはじめとする 18 世紀から 19 世紀にかけての彼らの先輩・同輩の詩人たちの用法が大きな影を落としているに違いない。この重要な事柄の検討はしかし別の機会に譲ることとし、ここでは先へと飛んで、20 世紀初頭のロシアを見てみたい。この間に位置する作家たちのスチヒーヤの用法も、今後詳細な調査が必要であるが、いまのところ確かだと思われることは、20 世紀初頭の作家たちが、それ以前の作家たちに比べて、より頻繁にスチヒーヤという言葉を用い、それに重い意味を担わせていたことである。

### 5.1. ニーチェ：アポロ的なものとデュオニソス的なもの

19 世紀末から、とりわけ 20 世紀初頭のロシアにおいて、ニーチェの『悲劇の誕生』(1872) がもった影響力は大きい。この著書の中心にある「アポロ的」と「ディオ

ニュソス的」という対の概念は、スチヒーヤという言葉の用法の歴史に大きな刻印を残したと考えられる。

ニーチェは、それまで秩序だったものと考えられていたギリシャ文化について、その根底に非合理的なものがあることを主張した。そしてその説明において、「アポロンの」と「ディオニュソス的」という美学上の概念を打ちだした。

アポロンは太陽の神で、光と明澄をあらわす。それは形式によって推論する精神に訴え、個別化の原理を担う。彫刻がこの神の原理をもっともよくあらわす芸術形態である。他方、ディオニュソスは酒の神で、酩酊と恍惚をあらわす。この神の担う原理は、本能的な混沌とした感情に訴え、個性をうち破って、より大きな全体としてあらわれる。音楽がこの原理をもっともよくあらわす形態である。ギリシャ悲劇は、この二人の神の名であらわされる力が相互に作用しあったところに成立している、というのがニーチェの考えである。

さて、この二つの原理のうち、「ディオニュソス的なもの」がスチヒーヤを説明する原理になるであろうことはいままでもない。じっさいニーチェの影響を受けたあとのロシアの著作家たちがスチヒーヤという言葉を使うとき、その背後にしばしば、ニーチェの「アポロンの」と「ディオニュソス的」という二項対立的な視点を認めることができる。すでに見たブロークの『文化とスチヒーヤ』においても、スチヒーヤと対置される「文化」のあり方を説明する際に「アポロンのな夢」という言葉を用いていた。

この発想を、ロシアにおけるニーチェ受容の代表者のひとりであるヴァチェスラーフ・イヴァーノフ（1866-1949）の中に探してみよう。彼はアポロンとディオニュソス、とくにディオニュソスについて多く論じている。

## 5.2. ヴァチェスラーフ・イヴァーノフ：ディオニュソスとスチヒーヤ

まず、論文『シンボリズムの教え』《Заветы символизма》（1910）を見てみよう。イヴァーノフによれば、シンボリズムの課題とは、内なる真の現実をシンボルという形で外にあらわすことである。ところで、チュッチェフの詩には二つの世界があるとイヴァーノフは言う。「それらを現在、われわれは、アポロンとディオニュソスと呼んでおり、それらの融合不可能性と不可分性をわれわれは知っており、真の芸術創造においてそれらの二面一体性が実現していることを感じている。しかしチュッチェフの魂の中では、ディオニュソスがアポロンよりも力強く、詩人はアポロンの祭壇に身をよせてディオニュソスの魔力から逃れなければならない。」「しかし体験の中でも

っとも価値ある瞬間、創作の中でもっとも予言的なもの、それは、〈沈黙〉の中で明かされる〈むき出しになった深淵〉とわれわれとのあいだに〈しきいがない〉とき、そのときに生じる、あの観照的陶醉への沈潜である。」<sup>27</sup> この沈黙の中での開示、それこそがシンボリズム的創造であるとイヴァーノフは言う。そしてイヴァーノフはチュッチェフを、「われわれの真のシンボリズムの真の祖」と呼ぶ。

われわれの視点から言えば、人が心の底でスチヒーヤに直面し、その力の作用を受けること、そのことを詩的に表現したことが、チュッチェフを「シンボリズムの祖」たらしめていることになるだろう。

ではイヴァーノフ自身は、スチヒーヤという言葉をどのように用いているか。まずは「要素」という機能的な意味で用いることが多い。たとえば『現代のシンボリズムにおける二つのスチヒーヤ』《Две стихии в современном символизме》(1908) という論文の題名、および本文がそうである。ここでのスチヒーヤは、原理、契機、志向とも言い換えられているが、たんなる静的な要素というのではない。この単語の持つ「力」のニュアンスがやはり感じられる。ではこの論文でイヴァーノフが論じる二つの志向とは何か。それはイデアリズムとリアリズムである。前者はアポロンの原理に対応し、後者はディオニュソスの原理に対応するものと考えてよい。したがって、この一見機能的なスチヒーヤの用法の背後にも、ニーチェ的な思考が控えているわけである。

イヴァーノフの文章において、スチヒーヤにあたえられた重みがもうすこし明示的にあらわれている場合がある。たとえば『ドストエフスキーと悲劇小説』《Достоевский и роман-трагедия》(1914) という論文から引用しよう。

Очевидно, вера для Достоевского — только мистический реализм в выше раскрытом смысле. Он глубоко коренится в инстинктивно-творческом начале жизни. Человек, не отрешившийся от идеалистического познания, может быть лишь близок к вере подсознательно. Его познанию она требует только «постулатом». Один «народ» — верен тому инстинкту, и кто верен ему, лишь тот от стихий народа. Слова «интеллигенция» и «народ» суть для Достоевского прежде всего транскрипция переживаний идеализма и реализма в русской душе.<sup>28</sup>

ドストエフスキーにとって信仰が、さきに明らかにした意味での神秘的リアリズ

ムにほかならないことは明らかだ。神秘的リアリズムは、生命がもつ本能的創造の契機に深く根ざしている。イデアリズムの認識から解放されていない人間は、ただ無意識的に信仰に近づくにすぎない。彼の認識にとって、信仰はいつまでも「仮定」にすぎない。「ナロード」だけが、かの本能に忠実であり、本能に忠実な者は、ただナロードのストヒーヤゆえにそうなのである。「インテリゲンツィア」と「ナロード」という言葉は、ドストエフスキーにとって何よりもまず、ロシアの魂におけるイデアリズムとリアリズムの体験を表現するものなのである。

ここには、さきにブロークにおいて見たと同じ思考法が見て取れる。ただしここでは、「ナロードのストヒーヤ」への高い積極的な評価があらわれている。それは以下の引用でいっそう浮かびあがる。

Речь идет о мистической психике народной стихии нашей — о заветной тайне нашей душевности.<sup>29</sup>

問題になっているのは、われわれのナロード的ストヒーヤにおける神秘的心性——われわれの魂のありようの奥深くにしまわれた神秘なのである。

«Шагуншка» озарен, — через любовь к истинному Христу, пусть неправую и темную, но бессознательно коренящуюся в его народной стихии, — скользнувшим по нему отблеском некоей благодати; он выступает великодушным, всепрощающим защитником и опекуном женской Души в ее грехе и унижении (Marie) — и умирает мученической смертью.<sup>30</sup>

「シャートウシカ」は光に照らされる——真のキリストへの愛をとおして、たとえ間違った暗い愛であっても、彼のナロード的ストヒーヤに深く根ざした愛をとおして、彼はおのれの中を通り過ぎるある種の慈悲の反照に照らされるのだ。そして彼は、(マリーの) 罪を犯して卑下する女性の〈魂〉にたいする、寛大で、すべてを許す庇護者、保護者となり、殉教者の死をとげる。

以上の引用から、イヴァーノフがストヒーヤを、「魂」душаという言葉と結びつけていたこともわかる。



## 6. ロシアとスチヒーヤ

スチヒーヤはナロードからさらに、ロシアそのものの性質をあらわす言葉としても使われる。

### 6.1. ベールイ：ロシア・メシア・スチヒーヤ

まず、ベールイ（1880－1934）がロシア革命のさなかに書いた『祖国へ』《Родине》（1917年8月）という詩の、最初と最後の連を掲げよう。

Рыдай, буревая стихия,  
В столбах громового огня!  
Россия, Россия, Россия, —  
Безумствуй, сжигая меня!

〈…〉

И ты, огневая стихия,  
Безумствуй, сжигая меня,  
Россия, Россия, Россия, —  
Мессия грядущего дня!<sup>31</sup>

慟哭せよ、嵐のスチヒーヤよ、  
雷鳴の火柱のなかで！  
ロシアよ、ロシアよ、ロシアよ——  
狂え、わたしを焼け！

〈…〉

そしておまえも、火のスチヒーヤよ、  
狂え、わたしを焼きつくせ、  
ロシアよ、ロシアよ、ロシアよ——  
来たるべき日のメシアよ！

ここでは「スチヒーヤ」が「ロシア」と韻を踏んでいる。そして最後には「メシア」が、それらと音声的・意味的につながっていく。

## 6.2. ベルジャーエフ：ロシア的スチヒーヤの危険性

ベルジャーエフ（1874—1948）によれば、ドストエフスキーはペテルブルグの中に「狂気に満ちたロシア的スチヒーヤ」*безумную русскую стихию*<sup>32</sup>を明かした。この引用は、ベールイを論じた『アストラル小説』《*Астральный роман*》（1916）という文章からだが、つぎに『ドストエフスキーの世界観照』《*Мирозерцание Достоевского*》（1921）の第7章「ロシア」から引用しよう。

Русский человек во власти своей природы, во власти своей земли, власти схиии. Это означает, что в строении души русского человека форма не овладевает содержанием, душевно-телесной стихией не овладевает дух.<sup>33</sup>

ロシアの人間は、おのれの本性、おのれの大地、おのれのスチヒーヤの支配下にある。これが意味することは、ロシアの人間の魂のなりたちにおいては、形式が内容を支配せず、精神が魂的・肉体的スチヒーヤを支配しないということである。

ベルジャーエフは、こうした「ロシア的スチヒーヤ」の危険性に警鐘を鳴らす。彼にとってスチヒーヤは多くの場合カオスと同義であり、これと対極にある概念が精神 *дух*、あるいは意志 *воля* である。

つぎは『自由なる精神の哲学』《*Философия свободного духа*》（1928）第4章「精神の自由」からの引用である。

Человек самоопределяется изнутри, из глубины в меру победы в нем духа над душевно-природными стихиями, в меру вбирания души в дух и внедрения духа в душу.<sup>34</sup>

人間は、そのなかで精神が魂的・自然的スチヒーヤ〔複数〕に勝利する度合いに応じて、また魂を精神に取りこみ、精神を魂に根づかせる度合いに応じて、内側から、深みから自己を規定するのである。

さらにベルジャーエフは、善悪の区別以前の非合理的な自由（第一の自由）と、善と真理をあたえる理性的自由（第二の自由）の区別を語りながら、こう書く。

Когда мы говорим, что человек достиг истинной свободы, победив в себе низшие стихий, подчинив их высшему духовному началу или истине и добру, то мы имеем в виду свободу во втором смысле.<sup>35</sup>

人間が、おのれのなかで低次のスチヒーヤ〔複数〕に勝利し、それらを高度な精神的原理または真理および善に従わせることで真の自由に達した、とわれわれが語る時、それは第二の意味の自由を言っているのである。

このようにベルジャーエフは、精神 дух を魂 душа の上に置き、魂と肉体の存在様態をスチヒーヤという言葉であらわす。しかしそもそも、自然＝スチヒーヤをこのように低い次元のものとする見方は、神の秩序の中に人間と自然を見るキリスト教思想に内在する視線である。

### 6.3. レーニン：スチヒーヤのコントロール

ベルジャーエフは、ロシア革命もまた「ロシア的スチヒーヤ」のあらわれとして考察している。ところで、これまで文学者、哲学者の文章を見てきたが、現実の政治にかかわる人々もまた、スチヒーヤという言葉を使っていたはずである。この面での本格的な調査はしていないが、ここでは一例として、レーニン（1870－1924）の革命以前の著作『何をなすべきか』《Что делать? Наболевшие вопросы нашего движения》

（1902）をのぞいてみよう。そこには形容詞スチヒーヌイ стихийный と、その名詞形スチヒーノスチ стихийность という単語が、きわめて頻繁に用いられている（名詞スチヒーヤはここでは用いられていない）。レーニンはこの本の中で当時の社会民主労働党を内部から批判している。すなわち社会民主労働党員の多くは「スチヒーヌイな（自然発生的な）労働運動」стихийное рабочее движение、「大衆のスチヒーノスチ（無意識性）стихийность масс を崇拝しているが、それは誤りである。大衆の「スチヒーノスチ」（無意識性）は、そのままではブルジョアのイデオロギーに従属してしまうだけなので、「意識性」сознательность へと高めなければならない、というわけである。

すでにブロードにおいて見たように、この時代、人々は「ナロード」の「スチヒーヤ」の胎動がカタストロフィーに導くエネルギーとなるという予感をもっていたわけであるが、そのエネルギーにどう向きあうかをめぐる政治実践者たちの立場の違いが、「スチヒーノスチ」の理解にあらわれているわけである。

つぎにレーニンが革命後に書いた『ソヴィエト権力の当面の課題』《Очередные задачи Советской власти》(1918)を見てみると、こんどは闘うべき対象として「プチブルジョアのスチヒーヤ」*мелкобуржуазная стихия*、「プチブルジョア的アナキーのスチヒーヤ」*стихия мелкобуржуазной анархии*、「ブルジョア的アナキーのスチヒーノスチ」*буржуазно-анархическая стихийность*といった表現が頻繁に使われている。克服すべきスチヒーヤの中味は、革命の局面によって変わるが、それがスチヒーヤ、スチヒーノスチであることには変わりがない。

このように、レーニンによるスチヒーヤ、スチヒーノスチという言葉の用法の中には、人間の内なる自然＝スチヒーヤは人間の意志以下のもの、まだ人の手によって開拓されていないもの、したがってこれから人間によってコントロールされるべきもの、という人間観・社会観が明白にあらわれている。もちろん、コントロールの方向はベルジャーエフとはまったく異なるが。

以上見てきたように、この時代、スチヒーヤという言葉は、さまざまな立場、さまざまな世界観を映しだしていたわけである。

## 7. スチヒーヤとしてのロシア語

最後にスチヒーヤという言葉がロシア語の特性をあらわすために用いられることを見ておきたい。

### 7.1. ヴァチェスラーフ・イヴァーノフ『われらの言語』

まず、ヴァチェスラーフ・イヴァーノフが1918年に書いた『われらの言語』《Наш язык》という論文を見てみよう。イヴァーノフは、ロシア語にとって教会スラブ語が果たした役割が大きいと述べる。教会スラブ語は、ロシア語にいわば魂をあたえたのである。そしてその教会スラブ語は、スラブ人にキリスト教と文字をもたらしたキュリロスとメトディオスのおかげで、ギリシャ語・ギリシャ精神の模写となったのだと言う。この二人の偉業についてイヴァーノフはこう書く。

Воистину, теургическим представляется их непостижимое дело, ибо видим на

нем, как сама стихия славянского слова самопроизвольно и любовно раскрывалась навстречу оплодотворяющему ее наитию, свободно поддавалась налагаемым на нее высшим и духовнейшим формам, отклоняя некоторые из них как себе чуждые, и порождая взамен из себя самой требуемые соответствия, не утрачивая ни своей лексической чистоты, ни самородных особенностей своего изначального склада, но обретая в счастливом и благословенном браке с эллинским словом свое внутреннее свершение и полноту жизненных сил вместе с даром исторического духовного чадородия.<sup>36</sup>

まことに、彼らの計りしれない事業こそ、秘術的なものと思われる。なぜなら、われわれはこの事業に、以下のありさまを見るからである。すなわち、スラブの言葉のスチヒーヤが、みずから、おのれを孕ませる啓示にたいして自発的に、愛をこめて自己を開いたこと、おのれに被せられる最高の、もっとも精神的な諸形式にたいして、自由意志で身をまかせ、それらの形式のなかからいくつかのものを異質なものとして斥け、そのかわりに、求められる対応物をおのれのなかから生みだしたこと、そして、おのれの語彙的純粋さも、太古からあるおのれの骨格の自生的特徴も失わず、ギリシャの言葉とのあいだの幸福で恵まれた結婚によっておのれの内的完成を達成し、最高度の生命力を獲得し、歴史的な精神的出産という賜物をもあわせて獲得したことである。

さらに、この教会スラブ語によって養われたロシア語について、以下のように書く。

Вследствие раннего усвоения многочисленных влияний и отложений церковно-славянской речи, наш язык является ныне единственным из новых языков по глубине впечатления в его самостоятельной и беспримесной пламенной стихии – духа, образа, строя словес эллинских, эллинской «грамоты».<sup>37</sup>

教会スラブ語の無数の流入と堆積を早い時期に消化した結果、われらの言語はいま、近代語のなかで唯一の言語、すなわち、おのれの独立した混ぜもののない炎のスチヒーヤのなかで、ギリシャの言葉の、ギリシャの「読み書き」の、精神と形象と成り立ちが刻印されていることの深さにおいて、唯一の言語なのである。

スラブ、そしてロシアの言語的スチヒーヤは、いわば土壌であり、孕むことのできる女性であり、そこにギリシャ文化という男性が種を蒔く、そういったイメージでとらえられている。このスチヒーヤのイメージを用いた文をもうひとつ掲げておこう。

Как Шопенгауэру казалось, что истинный стих от века предопределен и зачат в стихий языке, так – мнится – искони посеяны в ней и всякое гениальное умозрение, отличительное для характера нации, и всякая имеющая процвести в ней святость.<sup>38</sup>

ショーペンハウアーには、真の詩というものは、はるか昔にあらかじめ定められ、言語のスチヒーヤのなかに孕まれている、と思われたのだが、それと同様に、民族の性格に特徴的なあらゆる天才的な思索も、スチヒーヤのなかで咲き誇ることになるあらゆる聖性も、スチヒーヤのなかに太古から種として蒔かれているのだと思われる。

太古に種が蒔かれ、芸術、思想、宗教の花を開かせる大地、その大地とは「言語のスチヒーヤ」なのである。引用の前半は、ショーペンハウアー自身が述べた内容として書かれているが、ここにはロシア語だから成りたつような言葉の遊び（詩 стих とスチヒーヤ стихия の音の類似による）が認められる。すなわち詩 стих（スチーフ）とは、スチヒーヤ стихия という大地に咲く花なのである。

## 7.2. マンデリシュターム『言葉の本質について』

シンボリズムを批判し、アクメイズムを標榜した詩人マンデリシュターム（1891–1938）には、言葉に関するエッセイ『言葉の本質について』《О природе слова》（1922）がある。ここでもスチヒーヤという言葉が独自の比喻の中で用いられている。

Русский язык — язык эллинистический. По целому ряду исторических условий, живые силы эллинской культуры, уступив Запад латинским влияниям и ненадолго загощиваясь в бездетной Византии, устремились в лоно русской речи, сообщив ей самобытную тайну эллинистического мировоззрения, тайну свободного воплощения, и поэтому русский язык стал

именно звучащей и говорящей плотью.

Если западные культуры и истории замыкают язык извне, огораживают его стенами государственности и церковности и пропитываются им, чтобы медленно гнить и зацветать в должный час его распада, русская культура и история со всех сторон омыты и опоясаны грозной и безбрежной стихией русской речи, не вмещавшейся ни в какие государственные и церковные формы.<sup>39</sup>

ロシア語はギリシヤ精神的な言語である。数多くの歴史的條件のゆえに、ギリシヤ文化の生きた力は、西欧をラテンの影響にゆだね、子のないビザンチンにしばらく逗留し、ロシア語のふところをめざして進み、ロシア語にギリシヤ精神的な世界観の独自の神秘、自由なる受肉の神秘を告げた、**だからロシア語は、まさに音を響かせ物と言う肉体となったのだ。**

西欧のもろもろの文化と歴史が言語を外から閉じ、国家性と教会性の壁で囲みこみ、言語をおのれに染みこませ、来たるべき言語崩壊の時期に、ゆっくりと腐り、青藻で覆われようとしているとするなら、ロシアの文化と歴史は、いかなる国家形式、教会形式にも収まらないロシア語の峻厳にして広漠たるスチヒーヤによって、四方から洗われ、取り囲まれているのである。

この論文の別の版のタイトルは「ロシア文学における内的なギリシヤ的精神」《О внутреннем эллинизме русской литературы》となっている。ここで言う「ヘレニズム」とは、歴史的な概念としての「ヘレニズム」ではなく、この言葉が本来意味した「ギリシヤ風の流儀」「ギリシヤ的なありかた」「ギリシヤ的精神」という意味だろう。ロシア語はそのような意味で「ヘレニスティック」な言語、つまりギリシヤ精神を受け継ぐ言語だというのである。

さてこの文章は、一読して、上に見たヴァチスラーフ・イヴァーノフのロシア語観の強い影響下にあることがわかる。イヴァーノフにおいては、スラブ語のスチヒーヤが、ギリシヤ文化にたいして「自由意志で身をまかせ」たと言われていたが、マンデリシュタームは、それに対抗するかのように、ギリシヤ文化のロシア語における「自

由な受肉」という考えを打ちだしている。女性と男性の結婚にたいする、ロゴスの受肉という観念。「受肉」を語るマンデリシュタームはこのあと、言語の「肉体」性、物としての言語の具体相を強調する。

また、植物の比喻もイヴァーノフに通じる。言語から生まれる文化を、大地に開花する植物ととらえたイヴァーノフ。一方、周囲の環境から隔絶した土壤（西欧の言語）のなかで、自家製の毒をためて腐敗していく植物（西欧の文化）というイメージを語るマンデリシュターム。

しかし何よりも注目したいのは、どちらも「言語のステヒーヤ」を語っていることである。しかし両者のとらえ方はかなり違う。イヴァーノフにおける「言語のステヒーヤ」とは、種をうけいれる土壤としての言語である。未開拓のもの、種が蒔かれることを待っている原初的な状態、それが「言語のステヒーヤ」である。一方マンデリシュタームは、ロシア語と他の言語を比較する視点から語る。すなわち、閉じられた西欧語と対比された、荒々しい力を秘めた広大無辺さ、人間の力を超えた自然と相同的なあり方、——それが彼にとって、ロシア語という「言語のステヒーヤ」なのである。しかしこれはまだ言語とステヒーヤをめぐるマンデリシュタームの考え方の一面にすぎない。論文の別の箇所を見てみよう。

У нас нет Акрополя. Наша культура до сих пор блуждает и не находит своих стран. Зато каждое слово словаря Даля есть орешек акрополя, маленький кремль, крылатая крепость номинализма, оснащенная эллинским духом на неутомимую борьбу с бесформенной стихией, небытием, отовсюду угрожающим нашей истории.<sup>40</sup>

われわれにアクロポリスはない。われわれの文化はこれまで、放浪するばかりで、自分の国を見いださなかった。そのかわりに、ダーリの辞書のひとつひとつの単語が、アクロポリスという堅い果実であり、小さな城塞であり、ノミナリズムという、翼をもつ砦であり、形式のないステヒーヤにたいする飽くなき闘いに備えて、われわれの歴史をいたるところから脅かす無との闘いに備えて、ギリシャ精神を装備した砦なのである。

引用中の「ノミナリズム」（唯名論）という言葉については、べつの箇所で、「ロシアのノミナリズム、すなわち言葉それ自体のリアリティについての考え方」と説明して



いる。

さて上の引用では、植物の比喻や、陸と波へのたとえから、一転して軍事的な比喻が用いられている。そしてスチヒーヤは、人間が闘い、克服すべき対象としてあらわれている。その闘いの砦が言葉なのであり、ロシア語という砦の強みは、ギリシャ精神で武装していることだということである。さきほどの引用では、言葉そのものがスチヒーヤであり、そのことが肯定的な意味をもっていたのだが、こちらの引用では、言葉はじつはスチヒーヤと闘う砦だということになっている。この二つの主張は矛盾しているように思われる。矛盾でないならば、両者はたまたま同じスチヒーヤという言葉を用いているだけで、無関係なものを見なすべきなのだろうか？

そこで、「翼をもつ砦」という表現に注目してみよう。この表現は、「翼をもつ言葉」というホメロスの英雄叙事詩に由来する言い回しを踏まえていると思われるが、これによって「翼」を「砦」と結びつけることで、本来一カ所に固定されるような堅固な物が、自由軽快に飛翔するという、二重性を帯びたイメージが打ちだされている。この二重性をスチヒーヤの観点から説明すれば、つぎのように言えるだろう。

人類は太古から、自然＝スチヒーヤと直面し、多かれ少なかれ、それを克服しながら生活してきた。しかし克服とは、相手を消滅させることではなく、相手を取りこむことである。そして問題は克服の方法である、古代ギリシャは都市国家ポリスを築き、その頂にはアクロポリスという実を突らせた。のちの西欧諸国は、国家と教会という強固な制度を作りあげた。そうした砦（都市や制度）によって彼らはスチヒーヤ（自然あるいは未開状態）に向きあった。一方、強力な砦を作らなかったロシアにできることは、ただ言葉だけを武器にして、じかに自然＝スチヒーヤに向きあうことだった。そのため、ロシア語はスチヒーヤと闘いながらも、スチヒーヤの息吹をつねに吸収している。そして、固定されることなく自由に羽ばたくロシア語は、それ自体がスチヒーヤになる、——ということではないだろうか。ここから、人間とスチヒーヤのあいだに巨大な壁（制度）を築き、言葉まで囲いこむことでスチヒーヤとの直接の接触を失ってしまった西欧と違いが生じることになる。

以上のようなことは、もちろんマンデリシュタームが直接書いているわけではなく、彼の論にたいするひとつの解釈である。そしてこの解釈を別の言い方で表現するなら、こうも言えるだろう。スチヒーヤと闘いつつスチヒーヤのエネルギーに満たされる人間の営み、この営みにおいて人間とスチヒーヤを媒介するもの、それが言葉、すくなくともロシア語なのであると。

### 7.3. おわりに

こう見てくると、スチヒーヤをどうとらえるかという問題は、結局、自然と人間をどうとらえるかということにほかならないことがわかる。そしてロシアの著述家が、「自然」をあらわす別の単語ではなく、ほかならぬ「スチヒーヤ」という言葉を使うとき、彼は、自然と人間のあいだに何らかのダイナミックな関係を感じとっていると考えられる。

以上、19世紀から20世紀初頭のスチヒーヤの用例を検討したが、ここに取りあげたものは、もちろんほんの一端にすぎず、今後、19世紀以前を含めて、もっとさまざまな作家の用例を検討しなければならない。また、20世紀初めから現在にいたるまで、スチヒーヤは、あいかわらずロシアとロシア語の独自性を表現するために用いられている。たとえば、詩人ブローツキー Иосиф Бродский には「スチヒーヤの威力」《Власть стихий》(1980) というエッセイがあるし、批評家ミハイル・エプシュテイン Михаил Эпштейн にも「スチヒーヤについて」《О стихиях》(1992) というエッセイがある。どちらもきわめて興味深いものであるが、これらについての検討は別の機会に譲りたい。

#### 注

<sup>1</sup> Словарь современного русского языка: В 17 т. Т.14. М.; Л.: Наука, 1965. С.890-894.

<sup>2</sup> Liddell-Scott-Jones. A Greek-English Lexicon. Oxford, 1961. P.1647.

<sup>3</sup> Черных П.Я. Историко-этимологический словарь современного русского языка. Т.2. М.: Русский язык, 1993. С. 446.

<sup>4</sup> Там же. С. 203.

<sup>5</sup> Tresor de la Langue Française. Dictionnaire de la Langue du 19<sup>e</sup> et du 20<sup>e</sup> siecle. Т.7. Klincksieck, 1979. P. 836.

<sup>6</sup> Словарь русского языка: В 4 т. Под. ред. В.М. Волина и Д.Н.Ушакова. Т.4. М., 1940. С.520-521.

<sup>7</sup> Артюнова Н.Д. Язык и мир. Человек. М.: Языки русской культуры, 1998. С.808-814.

<sup>8</sup> Блок А.А. Собрание сочинений: В 2 т. Т.4. М.: Художественная литература, 1990. С.119. なお、引用中のアンダーラインは原文にあるものではなく、筆者がスチヒーヤおよび関連の言葉に注意をうながすために引いたものである (以後すべて同様)。

<sup>9</sup> Там же. Т.2. С.313.

<sup>10</sup> Там же. Т.2. С.377.

<sup>11</sup> Там же. Т.4. С.416.

<sup>12</sup> Пушкин А.С. Полное собрание сочинений: В 17 т. М.; Л., Изд. АН СССР, 1937-59. Т.2.

C.331.

<sup>13</sup> バイロン (および他のロマン派の詩人たち) は、しばしば自然の偉大さを *elements* という言葉であらわし、一方、批評家たちはバイロンの人間的性質を *elemental* という形容詞で表現している。ロシア語のスチヒーヤという言葉にロマン主義の色合いが刻印されるにあたって、イギリスをはじめとする西欧のロマン主義がどのような役割を果たしたかは、今後調査すべき重要な課題である。

<sup>14</sup> *Пушкин А.С. Полное собрание сочинений. Т.3. С.65.*

<sup>15</sup> *Тютчев Ф.И. Полное собрание сочинений и письма: В 6 т. Т.2. М.: Классика, 2003. С.230.*

<sup>16</sup> *Пушкин А.С. Полное собрание сочинений. Т.3. С.65.*

<sup>17</sup> *Пушкин. А.С. Медный всадник. Л.: Наука, 1978. (Серия «Литературные памятники»). С.11.*

<sup>18</sup> Там же. С.15.

<sup>19</sup> Там же. С.9.

<sup>20</sup> *Пушкин. А.С. Полное собрание сочинений: В 17 т. Т.8. С.10.*

<sup>21</sup> *Одоевский В.Ф. Сочинения: В 2 т. Т.2. М.: Художественная литература, 1981. С.155.*

<sup>22</sup> Там же. С.206.

<sup>23</sup> *Тютчев Ф.И. Указ. соч. Т. 1. С.110.*

<sup>24</sup> *Тютчев Ф.И. Указ. соч. Т. 2. С.41.*

<sup>25</sup> *Тютчев Ф.И. Указ. соч. Т. 1. С.133.*

<sup>26</sup> この詩の自筆原稿には、以下のような第四連が続いている。И от земли до крайних звезд / Все безответен и поныне / Глас вопиющего в пустыне, / Души отчаянной протест? (そしてこの大地から彼方の星々まで / いまだに答えを見いだせぬままなのか? / 荒野に呼ばれる者の声は、 / 魂の絶望に満ちた抗議は。) *См.: Тютчев Ф.И. Указ. соч. Т.2. С.300.*

<sup>27</sup> *Иванов В.В. Родное и вселенское. М.: Республика, 1994. С.181-182.*

<sup>28</sup> Там же. С.303.

<sup>29</sup> Там же. С.306.

<sup>30</sup> Там же. С.311.

<sup>31</sup> *Белый А. Сочинения. В 2 т. Т.1. М.: Художественная литература, 1990. С.215-216.*

<sup>32</sup> *Бердяев Н.А. Типы религиозной мысли в России. Париж: YMCA-Press, 1989. С.430.*

<sup>33</sup> *Бердяев Н.А. Миросозерцание Достоевского. Париж: YMCA-Press, 1968. С.166.*

<sup>34</sup> *Бердяев Н.А. Философия свободного духа. М.: Республика, 1994. С.92.*

<sup>35</sup> Там же. С.93.

<sup>36</sup> *Иванов В.В. Указ. соч. С.397.* なお、引用中、*пламенной стихии* (炎のスチヒーヤ) という箇所は、現在の版ではどれもこのようになっているが、原稿にもとづくテキストと詳細な注釈を公表したトロイツキーによると、ここは最初の版および自筆原稿にもとづいて *племенной стихии* (民族のスチヒーヤ) とすべきである。*См.: Троицкий В.П. «ПАРЕРГА И ПАРАЛИПОМЕНА» (Статья Вяч. Иванова «Наш язык» — публикация, комментарии и размышления) // Вячеслав Иванов — творчество и судьба: К 135-летию со дня рождения. — М.: Наука, 2002. С.203-226.* 本稿での引用は、煩雑を避けてこのテキストに拠らなかつたが、上の点は重要であるので指摘しておく。

<sup>37</sup> *Иванов В.В. Указ. соч. С.397.*

<sup>38</sup> Там же. С.397.

<sup>39</sup> *Мандельштам О.Э.* Об искусстве. М.: Искусство, 1995. С.225.

<sup>40</sup> Там же. С.229.